

## まえがき

高島 元洋

日本儒教の流れは古い。仏教が日本に伝わるのは六世紀あるいはそれよりはやいと考えられているが、儒教の伝来はそれ以前になるかもしれない。しかし、古い時代の儒教について思想的意味を理解するのは資料的にむづかしい。また、儒教が思想として重要な意味をもつのは、はるか後世になってからである。

本書の論文中にも説明するが、近世儒教は藤原惺窩（一五六一—一六一九）にはじまる。惺窩は儒教にとって象徴的な人物である。ここにおいて中世仏教との決別があり、日本儒教の思想史の意味である「人倫」が自覚される。

つづいて日本社会に儒教の本格的な受容がなされる。この過程は一般的には朱子学から古学への展開として理解される。初期の段階において、朱子学が受容される（林羅山一五八三—一六五七、山崎闇斎一六一八—一六八二など）。ここにおいて朱子学の全体像が精密にしめされる。つぎの段階では、この朱子学を批判して古学が形成される（伊藤仁斎一六二七—一七〇五、荻生徂徠一六六六—一七二八など）。古学は、きわめて独創的で高度に完成された思想であった。

近世儒教のこのような展開において、これまでの研究は、仁斎・徂徠など古学が中心であった。たとえば、徂徠については丸山真男『日本政治思想史研究』、日野龍夫『徂徠学派』、平石直昭『荻生徂徠年譜考』な

ど、仁齋については相良亨『伊藤仁齋』、石田一良『人物叢書 伊藤仁齋』、子安宣邦『伊藤仁齋―人倫的世界の思想』などと、さまざまな視点からの研究を思いうかべることができる。

近世儒教の思想的研究が古学中心になる理由には、いろいろな事項を考えることができる。煩雑になるから、以下にはおもなもののみをあげておく。この現象において重要なことは、ただ研究対象が偏っているということではなく、日本儒教にかんする偏見の温床になっているということである。

- (1) そもそも古学が思想的に完成度が高いことは事実である。また資料的にも整備されている。
- (2) 古学に先行する日本朱子学は、中国の朱子学の模倣にすぎず、独創的な要素がないという先入観がある。これは井上哲次郎『日本朱子学派之哲学』以来の理解である。
- (3) それゆえに日本朱子学にかんしては、研究する価値もないということであろう、ステレオタイプの理解に終始し、多数の資料があるにもかかわらず整理が不十分である。
- (4) さらに問題になることは、(2) にしめたように日本朱子学は中国の朱子学の亜種であると考えられることから、中国思想を基準として日本思想を解釈する(いわゆる中華思想) という本末転倒な研究になることである。
- (5) また同じ議論の延長線上で、日本朱子学は独創性のないイデオロギーであり、ようするに前近代の封建思想・国体思想にすぎないと評価される。

(2) については、かつて『山崎闇齋―日本朱子学と垂加神道』(ペリカン社、一九九二)において、日本朱子学が中国の朱子学とまったくことなる思想であり、朱子の忠実な祖述者たらんとした闇齋がいかに

朱子学を誤解したかを考えた。

日本朱子学と中国の朱子学との比較には、きわめて微妙な問題がある。従来この両者が同質であると考えられてきたのは、両者が専門用語（天人合一、太極、理、仁など、またさまざまな修養概念）を共有するという理由があった。しかし術語はおなじであつても、思想や世界観がまったく異なることがある。このことは専門用語の用法を厳密に比較することによって証明することができる。

闇斎が、朱子の祖述者たらんとすることとなる世界観にいたつたのは、闇斎の誤解なのかもしれない。しかし日本朱子学は、いったいに闇斎と同様の朱子学理解をしている。つまり一般論でいえば、中国の朱子学が日本においてことなる思想として受容されたということとはたんなる個々人の誤解ではないということである。中国の朱子学は、中国の社会構造に対応して形成された思想である。この思想が、ことなる社会構造をもつ日本にそのまま移植されることはない。中国と日本と社会構造がことなる以上、思想の理解がことなるのは当然なのである。

問題は、このような社会構造の差異を無視して、日本朱子学と中国の朱子学とを同質の思想であるとすることからおこる議論の混乱である。

くりかえされる議論は、（２）のような、同質であり模倣であるから、日本朱子学には独創性がないということであり、そのあげくには、（４）中華思想を基準とする日本思想の評価に帰結し、あるいは（２）の延長線上に、（５）日本朱子学は、独創性のないイデオロギーであつて、反動的な封建思想・国体思想（天皇制イデオロギー）にすぎないということになる。

このようにして従来の研究の混乱は、日本朱子学の思想的な意味をはじめから排除し、否定的理解に終始するわけであるが、そうすると日本朱子学だけではなくけつきよく日本儒教全体の焦点がうしなわれ、曖昧

なものとなつてゆく。なぜなら日本儒教の根幹にはつねに日本朱子学があるからである。こうして儒教の基  
本像において動揺しつづけ、既成の断片的な議論が当然のようになりかえしあらわれるだけで、日本朱子  
学・日本儒教の全体はいっこうにあきらかにならないのである。

※

本書は、以上のような経緯から、日本朱子学を中心にあらためて近世日本の儒教思想を考える意図で編集  
した。

朱子学が日本と中国とではことなる思想・世界観（概念の総体）となることは、すでに旧著で証明した。  
本書は、さらに日本儒教・日本朱子学が中国の儒教・朱子学とことなることを、それぞれの社会構造から説  
明し、日本儒教・日本朱子学の思想的特徴が「人倫」という観念にあること、その具体的様態が「多様性」  
にあることを論証した。

この過程において取りあげた儒教は、古学だけではなく日本朱子学などをふくむ。さきにふれたように古  
学の研究はおおい。一方、日本朱子学は先人観で処理される。まして日本各地に点在する無数の儒者はた  
なる郷土の偉人にすぎない。ここには思想家として受けとめる姿勢はない。日本儒教の思想的研究はこれ  
で一部の儒者をとおしておこなわれてきた。日本儒教の全体があきらかにならない所以である。

本書は、古学だけではなく日本朱子学を、中央の儒者ではなく地方の儒者に注目し、日本儒教の全体をさ  
ぐるところみをした。とくに、これまでほとんど紹介されることのなかった上総道学について、すでにある  
研究を整理し、儒教史の流れのなかに位置づけた。またその基本文献について、高島と大久保紀子・長野美

香は長期にわたる研究会をもち、厳密な読解をほどこし、今回はじめて解題・注釈・校合を附した本文を掲載することができた（本書所収）。

大久保紀子の記録によると、高島・大久保・長野の研究会は一九九九年十二月からはじまり、基礎文献である稲葉黙齋『姫島講義』、同上『処土越復伝』、同上『先君子行実』、林潜齋『稲葉黙齋先生伝』、稲葉黙齋『先達遺事』、稲葉黙齋『墨水一滴』を解読した。これにより近世儒教をめぐるひとびとの交流や思想の基礎となるものを考えることができた。

この間、同時に各地の図書館や資料館を調査した。謝意をもって簡略な記録を掲載する。二〇〇〇年（東京都町田市・無窮会。千葉県文書館。千葉県山武市成東・元倡寺。都立中央図書館。新潟県新発田市立図書館）、二〇〇三年（茨城県立古河歴史博物館）、二〇〇四年（九州大学附属図書館）、二〇〇五年（福井県小浜市立図書館）、二〇〇八年（宮崎県高鍋図書館）。

※

本書の構成について簡単に説明しておく。全体は、【研究編】と【資料編】との二分冊よりなる。それぞれの内容は以下のとおりである。

【研究編】は、「第一部 日本儒教についての研究」で、概要は以下のようなになる。

#### 第一部 日本儒教についての研究

一 高島元洋「思想史」とは何か―「日本倫理思想史」に関する方法論的反省」

本論文は「日本倫理思想史」の定義を考える。「思想史」は、歴史の一分野としての思想史、あるいは個別の教義史としての仏教史・神道史など、また政治思想史・教育思想史など、さまざまな立場からの研究がおこなわれている。では「倫理思想史」はどのような方法論により成立するのか。本論文は、和辻哲郎が「倫理思想史」を「倫理」「倫理学」との関係から定義したことをふまえ、「歴史」の一分野としての思想史ではなく、「倫理学」と一体の学問として理解する。

ここにおいて問題となることは、普遍である「倫理学」と特殊である「倫理思想」との関係であり、普遍は特殊において成立することを論ずる。

## 二 高島元洋「日本儒教の特徴」

本論文は、日本儒教を理解する従来の主要な枠組みを再考し、さらに検討すべき課題を問題にする。丸山真男『日本政治思想史研究』における理解の枠組みは「近代化論的観点」である。日本の近代化を問題にし、朱子学の「自然的秩序の論理」から徂徠学の「作為の論理」への転換を論じる。相良亨『近世の儒教思想』の枠組みは複合しており（「比較思想的観点」と「倫理学・倫理思想的観点」）である。儒教という外来思想にたいする日本の伝統的倫理観の質をとりあげ、朱子学の「敬中心の儒学」から仁齋学の「誠中心の儒学」への展開を解釈する。

先行研究の分析から検討すべきことがみえてくる。（「比較思想的観点」）から、朱子学を成立せしめる中国の社会構造が宗族（家族制度）と科擧・士大夫（官僚制度）であること、日本儒教を成立せしめる社会構造が近世における統一政権（徳川幕藩体制）であることがわかる。ここにおいて、日本儒教は中国思想から分離する。そして江戸時代にあたらしく要求された思想である「人倫」（五倫五常・人間関係）という観念が

〈倫理学・倫理思想史的観点〉の課題となる。

### 三 高島元洋「日本朱子学論」

日本儒教・日本朱子学をかんがえるとき、おなじ儒教であるということで中国・朝鮮半島・日本を単純にひとくくりにはできない。それぞれの社会構造と思想との対応を比較思想的に検討することが前提になる。本論文は、そのうえで日本儒教・日本朱子学の思想的特徴が「人倫」という観念にあること、その具体的様態が「多様性」にあることを問題にする。

まず日本儒教・日本朱子学の様態について、思想の多様性、機能の多様性、機能の具体的形態・支持階層における多様性などを検討し、実際の具体例を、亀門学（徂徠学）、楠本端山・碩水（朱子学）など九州の儒教、あるいは稲葉迂斎・黙斎などによる千葉の上総道学（朱子学）にみてゆく。つぎに思想そのものが、朱子学と日本朱子学とでいかにことなるかを修養概念「敬」によって検討し、最後に「人倫」と「多様性」との関係をかんがえる。

### 四 大久保紀子「稲葉黙斎論」

千葉の朱子学（上総道学）の中心人物である稲葉黙斎について、これまでまとまった研究はない。本論文は、黙斎の言行をていねいにたどり、黙斎がどのような理を求め、その思想がいかなる学問となり波及したかをあきらかにする。崎門の一人の儒者の内実を具体的に把握することは、近世から近代にかけて崎門が果たした役割と意味をより正確に、かつ深く理解するためには必要不可欠な作業である。

まず本論文は、黙斎の若い頃の「狂」とされる放逸な言行の意味を、「超俗」の儒者達、すなわち山崎闇

斎とその高弟、また稲葉迂斎・久米訂斎と比較することによってあきらかにする。つぎに上総において、黙斎の儒教がどのような役割をはたしたかを検討する。黙斎の礼についての講義は、礼式を学ぶ機会のない上総の人々にとつて、礼をとおして内在する理を自覚し、人として本来の在り方を実現していくような、啓蒙的な意味があった。上総における儒者は、江戸とはことなり、社会機構に組みこまれることなく、偏見や先入観もなかった。門人達は、純粋な知的意欲をもつて学び、名利や矜持などの雑物をまじえず、生活のなかにその成果をあらわした。

【資料編】は、「第二部 山崎闇斎学派についての資料」「第三部 上総道学についての関連論文と資料」よりなり、概要は以下のようになる。

## 第二部 山崎闇斎学派についての資料

五 稲葉黙斎『姫島講義』（解題・注釈・校合 大久保紀子）

六 稲葉黙斎『姫島口義』（解題・注釈・校合 大久保紀子）

『姫島講義』は、稲葉黙斎が、上総における父迂斎の門人達のため、道学の要諦を説いた書である。ここに黙斎の若いときの思想を知ることができる。また同時に、上総道学が発生する場面を理解することができる。『姫島講義』の原型は、黙斎自身の筆になる『姫島口義』である。『姫島口義』は、黙斎が旅先で、門人達のための私信としてしたためたものであった。原本である『稲葉黙斎先生姫島講義真蹟書』（千葉県山武市成東・熱田秀夫氏蔵）を附載する。

七 稲葉黙齋『處士越復傳』（解題・注釈・校合 大久保紀子）

本書は、黙齋が、その生涯の二十四歳までをつづった狂文体の自叙伝である。若き黙齋の自画像である。また江戸という都市に住む、若い儒者たちの活動や交流がどのようなものであったかを知る貴重な資料である。

八 稲葉黙齋『先君子行實』（解題 長野美香、注釈・校合 大久保紀子・長野美香）

本書は、佐藤直方の高弟・稲葉迂齋正義の伝記である。著者は、迂齋の次男・稲葉黙齋正信である。稲葉家の系譜、迂齋の一生や藩儒としての経歴、また人柄・学徳・著作などを伝える。跋文（篠原惟秀「書<sub>二</sub>先君子行實改本後<sub>一</sub>」）によれば、宝暦十一（一七六一）年末には草稿が存在した。

九 稲葉黙齋『先達遺事』（解題・注釈・校合 大久保紀子）

本書は、黙齋によつてあらわされた江戸時代の儒者の記録である。儒教史の基礎的な資料である。記載される逸話の大半は、山崎闇齋とその高弟をはじめとする崎門の儒者であるが、伊藤仁齋・荻生徂徠などについても収録されている。成立は、明和元（一七六四）年ころ。刊本も多数ある。

十 稲葉黙齋『墨水一滴』（解題・注釈・校合 長野美香）

本書は、『先達遺事』の続編として、自序によれば明和三（一七六六）年に成立した。江戸期の朱子学受容の実際を知る上で貴重な資料である。『先達遺事』とともに、のちの原念齋『先哲叢談』（文化一三「一八一六」年）や徳齋（念齋の子）『先哲像伝』（弘化元「一八四四」年）につづく、儒者をめぐる啓蒙的評

伝の嚆矢である。

十一 林潜斎『稻葉黙齋先生傳』（解題・注釈・校合 長野美香）

本書は、黙齋門人・林潜斎秀直によってあらわされた黙齋の伝記である。林潜斎（花沢文二）は、千葉県東金市堀上村の人。農業。三十八歳の時、黙齋の門人となる。寛政中、丸亀藩（五万石）藩主京極氏に仕える。後、致仕し帰郷する。筆記に長じ黙齋の講話をおおく記録する。成立は黙齋死後であるが、解題を参照。岡直養「林潜斎事略」を附す。

十二 「人名索引」（大久保紀子・長野美香）

第三部 上総道学についての関連論文と資料

十三 大久保紀子「『孤松全稿』について―『黙齋艸』との関係」

『孤松全稿』は、稻葉黙齋の著作集である。ごく一部分は活字化されているが、全体は写本でのみ伝えられてきた。黙齋の業績あるいは思想を理解する場合、もつとも基礎的な資料である。しかしこの著作集には、成立年・成立過程の問題をはじめ、その全貌には不明な点がおおい。『孤松全稿』の完本（三十九巻本）は、唯一無窮会神習文庫（東京都町田市）にある。また元倡寺（千葉県山武市成東）には最後の五巻を欠く三十四巻本が残されている。本論文は、この間の事情についての調査研究である。

十四 長野美香「『稻葉家譜』について」

『稻葉家譜』は、延享四（一七四七）年、稻葉迂斎があらわした自伝である。稻葉家の系譜に始まり、迂斎自身の経歴をたどる。黙斎が『先君子行實』を作成するさいの資料となる。

十五 長野美香 「『迂齋文集』について」

『迂齋文集』は稻葉迂斎の著作集である。本論文は、茨城県立古河歴史博物館蔵本により『迂齋文集』とその続編について、成立・特色を考察する。

十六 長野美香 「稻葉迂斎・黙斎年譜」